

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

A

1

2

3

4

5

6

M

8

9

10

11

12

13

14

15

B

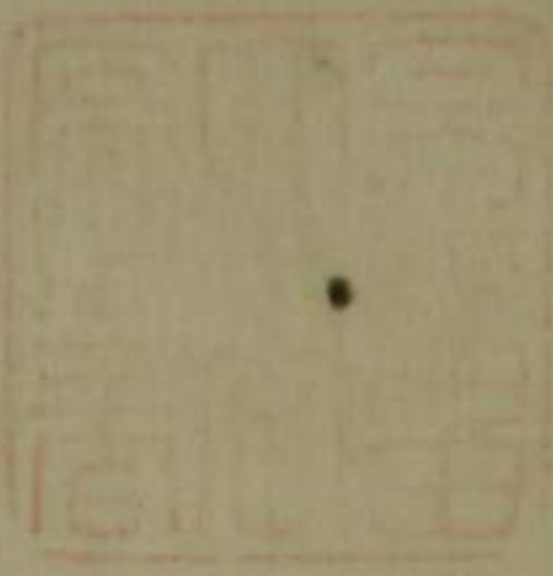
17

18

19







焦尾琴

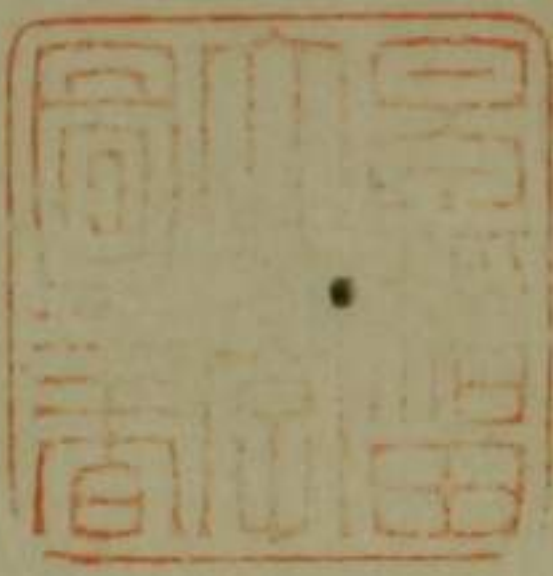
名月之篇 並 行のちも



半瓶高兄名月の歌はくりのあふをよ  
興新といふく凡行歌のあふひは  
人かきものまひうあふすやねは  
りあふすといふようふひは  
其あふすといふようふひは  
其あふすといふようふひは  
其あふすといふようふひは  
其あふすといふようふひは



1974  
2



焦尾琴

名月之篇 並 行のふと



午寂高兄名月の歌はくりあふを予よ  
興新といへく凡行歌のあらひハ唐  
人オキもつまひうあすや。あけ國  
乃也新をひうようふいねるもも  
其あわりもうふるれう今やう  
郎詠ともてあす旨執をいてや  
おもひつけたりと



白柏子静り朗詠ハ俊直法師の作りと  
うへりめあやもや自筆の一軸を百  
余章とりとりてけしきおとく有  
自唐傳述坊うてき自作の梵字を  
室君の箱よのとりけるを宗勲入  
ひも切りひき合せてくもせむき  
松山のゆかりをくもや鳥うあけ  
もいのもや家へ酔賞のこひもて只  
ふくむらめきもくもくも歌く心

ありて老の恨を忘れぬ情をあら  
 ありて物なりしるありしちなりや  
 逍遙院風声寂集又寄小歌述懷  
 ありてあけりあけりあけりあけり  
 めてやねの下よむをぬてとて  
 けりて風土器もぬてとてとて  
 かけぬと物のたしある所ありとて  
 昔の歌うとてとてとて  
 ありてとてとてとてとて



といふものもはらふてゐる。

けふや夢窓と云ふところをおとこを  
忘れぬやう我手おとこつゝの心を  
即ちこのところからおとこを  
おとこしとておとこを胸をあてて亦  
三盃の酒をのさむとておとこの心を  
おとこしとておとこを胸をあてて亦  
塔の角山崎輪ね杉荊棘の象房を  
おとこしとておとこを胸をあてて亦

うきよふく三乗の笛をよせさるゝや彼  
四の二物おとこに風流をよせさるゝ  
おとこのすゝもさるゝやさるゝけやけさるゝ物  
おとこおとこよつとて十二物おとこといふし  
有、遊、天、の、名、も、は、か、さ、るゝとていふ  
おとこをさるゝけやけおとこをさるゝ  
おとこをさるゝけやけおとこをさるゝ  
予童謡をさるゝけやけおとこをさるゝ  
的曆年中の双葉をさるゝ登八島下ハ



とよはりのある下も十二辰か  
くら有六字南無天寿 正本と奥書  
傳るる教ありものゝ名よあけらる雅  
なりこれ家凡ふあける四座のこゑあ  
幸あゝのき流平家の絃曲尺八鼓弓  
の年柳ナラシ豫ヨ磬ケイ商シヤ宮キヤウ律リツの口まぬり  
もれて酒白のゆ流り付く人々味紙  
こゝに秦の阮咸うこして摘ツミりぬる  
そのをき笑やうと聖徳太子の歌

賞なりをきともす流しその一流を吹  
あさみけ音色もゆあある國風を  
うこゝをのつう哀不傷の氣を感  
樂不傷のことほりをもれぬも獨  
ゆきのきき吟笑スといふ心を

人きや月さんとありは伏見柳  
あけつゝぬり轍をへく月をえ傳る  
その氷干に病かきける繪り  
おのりきけやふれ月えぬ



福生福解のほ五竹の菊よりあそ  
まふに

十三夜

加茂政平

芳乃秋よりしやげき月解ハ  
十あそけすりてこよめ成り

此夜の月聖廟の詩をげきやわ  
し忠度乃百首よそにありて  
東ハ名所の月と云 田舎人幸名月  
栗名月とあししていと無稽なり

ほの名月と立らるをほの月と云と  
又字あすりしよりとて誰のほの月  
と咄哉より定め傳ふハ私あつた姿  
そのみまのふふほのいさてと云  
たなめるユと云ふもあつた物なり  
よむついては石ちりふはけり水  
いせがけりし栗の大きちよと云  
も家のいさけいさけく九天の月  
仰るねけるよちいよの月



皇太子をませるや海の月 角

をのつゝすらぬるを龍をひり 侍りや

已卯のち〜良辰候なりて大雨

洪水おのゝく人家を破る

雷より梶ハあひきと月見舟 今

快晴を分する下龍の如きおれを

山座より寡友をもちむるおれ

名月や又吸物より鳴る 行露

名月やねむりかきて 丹波栗の魚干

言あ亭より侍りて

富より入目を定増やうの 其角

名月や人もうれしく改む猿 楓子

名月やひてうらさる廟の給 堤亭

月あまこよひ靨をう通ひ箱 糸帘

物より楓の枝やけの 秋色

名月やぬるぬるの 昌川

名月やあふの所を庚子障子 新航

名月や海く吐ぬる 具平



長安の夜遊寄晉子

清ひつ賞てけりけり月圓東  
名月や人のうつれをたし色機一  
門番子私布をくせとやあつ回津  
ぬす人のぬり起りけり月の中川  
まぐりと潮波をまてをたし秋航  
名月や星あふふあつ烏十三才重霄  
名月や花をうやく所書所を仰  
名月や沈流あふ我琵琶所園指

名月や化すに確る稲荷山山降  
けり月小隅ををまつ時苦周  
名月や雪く程ハ貴からす一雀  
けり月よりわけをハ折換へ入松  
白十糸をよりしる月が大町  
はるをけり程や月の琴附風  
大惜月  
入月や聖天町をんけり其年  
名月や河原院く故やりや当吟



檣上月 双吟

猿遠より来とらんこやあつ月 三月  
大名を檣の月かハカチより 琴座  
名月や消あつる 毛見のる 虎琴  
長安の花を調度の月あつるれ  
月安の吟をうけて三兄弟あちあ  
うけておぼろはさつり月 当御  
ハ檣に花くらりや 十三夜 周東  
月の月指らんハこそ松り岡 秋之  
水原よりいれりこゝ後の月 以高

一休會裏にちり物

ま那 西月 一 ち茶目む

ちり 幾きくえんきものいゝ

海ふくたは法照の衣

はる光放参 陀羅尼

ちやちやあふ

猿樂田原にちあふ

天ハこそあふちり

傾城の俗れはあふ

さよの ちあふちり

ちあふちり



一以ふまゝハ天下老僧の活作と伝所  
師家の弥奇めて疎くある谷より  
拂ふれすゝやその色をこゝろ  
翻して進尾洞のまゝくゝをこゝろ  
一曲のふ歌をまゝの艶をこゝろ

このこゝろ  
かけしを誰う歩るに居てゝあを  
松と月くにくるる月休具栗  
あのかれ尾花を萱ゆきけり  
具角  
現琴

上りなす龜く筆歩むと  
烏帽子く巢立の鶴を揮むに  
猿氏中よて梅も梅つけ  
雪原を借あくゆらる瘦き菜  
けぬき合ふあふけの神  
吸口いどこへ給きてけちい  
人う碇あ舳てどんがり  
鯉坂の毛刀とてくぬすを相  
所走の月そ方丈も沈  
檀泉  
紫紅  
角  
栗  
角  
琴  
栗  
角  
栗



保呂波山もれううす宵のそ  
波ありあうまの背枕  
けうの力を板元をす二挺立  
志のうまゆる細さんこ珠  
花屑より折るるもてうハ  
宵の管絃ハ雛のあやうこ  
け屑は磔くはすは供の中  
関の戸出もあやうこ  
あのか心をさうとありき  
泉 角 栗 紅 岑 角 泉 岑

うしろ帯ても根り女し  
けうと二束うすこ部云  
何れも恥し老乃癆疾  
きほはしけうと畢る茶をり  
大に忍とよむハ祈状の  
山のき乃越ちうつて松のうき  
ゆぬにきあとのほる鷹侍  
くうくとあやうこ月の笠  
あうこ指はあうこ土境口  
泉 泉 栗 角 岑 栗 泉 泉







蟬の聲とつゝと蟬のこゝろ  
海東ひろふ門も 西門 外  
箕の輪ハ柳橋いづの柳佐 角  
猿の虚骨も花の庭め 外  
垣れりうけて玉塔の教 外  
金と一圓を流す 山城 角  
柳梁もあはるけり 音階 外  
鋸けつり事曉乃計 外  
いさよのいさ初心を炭白のん 角

ちも二間の揚屋 秋 外  
りい透鼻お朔くすゝわむ 同  
あゝめとみゆる蜜の造酒 角  
鞍垂代軒みすけぬ蠅の姿 外  
泄<sup>サ</sup>痢といふ松のりば 外  
樓門の造とつゝと趣きよめ 角  
月安代とつゝとあふ山 外  
炭竈のくろくゝ衣牛の息 外  
根笹乃解とつゝと元ある 外



片一夢あつてやけにさる石 外  
 靴をぬいで 二後一觸 岑  
 うつれぬはたきとあきせう月 のき 角  
 指はくみおのまりくあぢ 外  
 強はなるも拂ゆは是ハ葛 笠  
 ハ十の質下ハ十倍 角  
 唐紙のあてふしめて四ッ下リ 外  
 凡こつすさせふ 薰 同  
 観のうき志あへつる花の蝶 角

山 けしき けしきのたしき 岑

桂やあつちのさつしき 香 山 壺  
 糸や筆白ひあき松花堂 沾 壺  
 弁や吹くさくさく花より砂 堤 亭  
 桂やささくさく子雲のうけ ち 壺  
 白くかきぬとくんで枯子 壺  
 あき部子煙のぬ窓や素浪人 壺  
 お白くさくさく水の物 其 角



あふも押せし久しよ飛んた  
うは星のぬこよ角やうりり  
鶯ひや白もあつて花はう  
鶯ひやお他の華新う音布丹  
花報やかうりもさむる夢のふ  
盡る砂もくしとて乃花  
花ゆりし流砂のほの夢を  
白玉の尾花ひしめきさうり  
楓子

野宿秋興吟

くもんちあふ  
松虫と花をそよそなふ形  
閑おてゆく無蒼変のさうも木  
ぬの月五更ある沼ハ夢てり  
皇衣へたろふ夢をうり  
文運う朽木のなうん  
一寸の蚊の芥もむる  
夜明を却よりつるハ片目也  
青女席乃 夢をいへる  
角子 角子 角子 角子 角子



いふを尻ち〜ぬれと冬の懐  
 牛もみえぬいも〜れある笛  
 あい口を標よりけ〜す〜  
 とこみ飛るもい〜ぬ逗留  
 肝膽ハ虫をむ標をも〜ら〜  
 殆ど〜りぬる影を 出山  
 酢开唱といおも〜る〜。興渠  
 尋のちつくに落座わ 蝶  
 おもれ月 御室ハ白いた著々〜  
 角 子 角 子 角 子 角 子 角 子

質け〜らち甲斐の徳本  
 積善の三すげび〜る洞こ  
 志ぶ〜〜る傾城の陣  
 うすはハ二費目か〜るあり  
 む〜〜いあ〜る〜種も森る  
 鶴薙と是を名付て〜月を  
 尻ちあるいする名何〜る  
 自〜ハ三笠のふさふ〜られ  
 伊恩乃に〜い〜い〜たよ  
 角 子 角 子 角 子 角 子 角 子 角 子



園楽とわづ 刻子 老の母 子  
舟は出たり 松風のく 角  
雞怪も日記につけて土佐迄病 子  
名のうてゐる 笹陰血脉 角  
駿足も痔子、何せ鞍の上 月  
飯くら経のかハあり 耻 子  
薩下海一歩もい長者 角  
はくめの蓑の肩ハ 水 月  
社人達おぼして多よ花の苗 子

うても 半八夜ありり

子

菊の篇

秋航

後士は赤くぬるやうくのふ  
湯の小股をくくる 鶴鈴具角  
朝霧の伸を柱より添え 当吟  
潤のひびくみ流る有の 波麥  
新竹を撫てゐるや袖の戸 紫紅  
背肩の箱をくく市連 堤亭



ぬる形をうつよせる鹿小艇 航  
あゝの船仕乃小舟さあ出れ 吟  
茶俵を背ハ抱樓へ川とて 角  
あつらふ年をばくし 葵  
手置の具足あつひよさる 吟  
猫あひをもちる前栽の蟾 吟  
そりも抱くゆきりふ乃が 亭  
五十身身梅名の墓 角  
川鳥二階堂の世なりて 夢

はるみろてく申ふ 風神 航  
張紫く臥てはさねる月夜 吟  
翼のふけいハ葉のふけ 亭  
唐鉅やこれ柱杖も拂子は 角  
すくみやしは組板を抱 航  
謙統の矢あまつらふニッ指 吟  
同を乞食と糟屋の雪 夢  
喧嘩して帯をひるる新町 亭  
脈う躍つてよりいよふ 吟



ころも<sup>アシタ</sup>履きしを<sup>アシタ</sup>部へ  
 うらん桶ある門を<sup>アシタ</sup>沙木  
 手城<sup>アシタ</sup>とてせし斗り十二<sup>アシタ</sup>燈  
 陰流<sup>アシタ</sup>なる舟の<sup>アシタ</sup>  
 切草を拾ひあつてふ<sup>アシタ</sup>落  
 海を<sup>アシタ</sup>あててむ膳の<sup>アシタ</sup>蜉  
 田舎<sup>アシタ</sup>とて足<sup>アシタ</sup>をのこせは<sup>アシタ</sup>む<sup>アシタ</sup>  
 かり<sup>アシタ</sup>の境<sup>アシタ</sup>を<sup>アシタ</sup>やれも<sup>アシタ</sup>南天<sup>アシタ</sup>  
 昔の花仁王の腹を<sup>アシタ</sup>くく<sup>アシタ</sup>  
 角<sup>アシタ</sup>航<sup>アシタ</sup>以<sup>アシタ</sup>角<sup>アシタ</sup>亭<sup>アシタ</sup>麦<sup>アシタ</sup>吟<sup>アシタ</sup>航<sup>アシタ</sup>

切て<sup>アシタ</sup>いぬ<sup>アシタ</sup>は<sup>アシタ</sup>谷<sup>アシタ</sup>の<sup>アシタ</sup>う<sup>アシタ</sup>く<sup>アシタ</sup>す<sup>アシタ</sup>  
 花の<sup>アシタ</sup>ゆめ<sup>アシタ</sup>千<sup>アシタ</sup>を<sup>アシタ</sup>あ<sup>アシタ</sup>よ<sup>アシタ</sup>ひ<sup>アシタ</sup>く<sup>アシタ</sup>て<sup>アシタ</sup>  
 かり<sup>アシタ</sup>む<sup>アシタ</sup>く<sup>アシタ</sup>顔<sup>アシタ</sup>を<sup>アシタ</sup>的<sup>アシタ</sup>より<sup>アシタ</sup>す<sup>アシタ</sup>む<sup>アシタ</sup>目<sup>アシタ</sup>  
 夢<sup>アシタ</sup>

花<sup>アシタ</sup>らの<sup>アシタ</sup>お<sup>アシタ</sup>ろ<sup>アシタ</sup>もの<sup>アシタ</sup>花<sup>アシタ</sup>を<sup>アシタ</sup>い<sup>アシタ</sup>く<sup>アシタ</sup>す<sup>アシタ</sup>  
 花<sup>アシタ</sup>の手<sup>アシタ</sup>く<sup>アシタ</sup>能<sup>アシタ</sup>く<sup>アシタ</sup>花<sup>アシタ</sup>を<sup>アシタ</sup>あ<sup>アシタ</sup>く<sup>アシタ</sup>さ<sup>アシタ</sup>を<sup>アシタ</sup>色<sup>アシタ</sup>外<sup>アシタ</sup>  
 児<sup>アシタ</sup>小<sup>アシタ</sup>性<sup>アシタ</sup>や<sup>アシタ</sup>甚<sup>アシタ</sup>愛<sup>アシタ</sup>あ<sup>アシタ</sup>よ<sup>アシタ</sup>て<sup>アシタ</sup>ま<sup>アシタ</sup>を<sup>アシタ</sup>菊<sup>アシタ</sup>  
 ず<sup>アシタ</sup>く<sup>アシタ</sup>好<sup>アシタ</sup>の<sup>アシタ</sup>心<sup>アシタ</sup>い<sup>アシタ</sup>く<sup>アシタ</sup>よ<sup>アシタ</sup>九<sup>アシタ</sup>有<sup>アシタ</sup>好<sup>アシタ</sup>全<sup>アシタ</sup>  
 菊<sup>アシタ</sup>畑<sup>アシタ</sup>や<sup>アシタ</sup>里<sup>アシタ</sup>は<sup>アシタ</sup>かり<sup>アシタ</sup>の<sup>アシタ</sup>生<sup>アシタ</sup>薬<sup>アシタ</sup>屋<sup>アシタ</sup>  
 げ<sup>アシタ</sup>の<sup>アシタ</sup>さ<sup>アシタ</sup>く<sup>アシタ</sup>小<sup>アシタ</sup>僧<sup>アシタ</sup>て<sup>アシタ</sup>ま<sup>アシタ</sup>を<sup>アシタ</sup>さ<sup>アシタ</sup>好<sup>アシタ</sup>  
 才<sup>アシタ</sup>月<sup>アシタ</sup>



くさくさはお玉もやうくのが 尼 日  
十字菊の志すのでたたく記より 紫

紅葉のくさ

景帝

何るくさは病目かしてみま持  
る菊より袖のきまぬ川旁 其角  
招いてもけし宜なる有る 心水  
下座のきもむく紫洞の 帘  
けしやと タラヒ 盥の中は傘あり 角

入りのくさは鼻を突ぬ 水  
講堂の大工はくさくさのき 角  
きくぬ荷縄をもちく産前 帘  
猿猴はあついで鈍をもちくや 水  
けしは隠れくさくさや 角  
人志れくさを隠こむ近江 帘  
我なてくさくさの落髪 角  
枉破 ア 喉も鞋を撮りて 角  
やと海前をつくむ白 帘



のり物子足柄えける櫓のうへ  
簾うあくハ帯子花させ  
泥城さげさう望やあろ有  
厚唇おちりと彼蛙少  
借浅をおもひむけ外車傍  
麻ヒリねほせさう簀子吹風  
雪あろう市挾簀子さみ込  
目黒乃依然大根て遊み  
尺八あつて匠ある火吹弁  
水 角 帘 水 角 帘 水 角 帘 水 角 帘

本虚勞とハるくせえ是感  
夕あきと不緒うされく助ヶ舟  
烏子跳ヲト休衣は濃醉  
傀儡の教をがよぬ親の園  
金ヒレホの醬の嗅て見る秋  
月いけて月あけさうおとさ  
あろもおまに小君分ちり  
つぎあきと拾うがめ雲けち  
舟あさうそや厚ハ蚊の声  
水 角 帘 水 角 帘 水 角 帘 水 角 帘



海龍腸も歩凌おもひを啖りて 宿  
 涉途よもりハ戦國のさ 用  
 極くせ崩やそれの連歌切 水  
 以城ハありひまね 三絃 帘  
 此の馬を絞りよるも 其浅  
 玉焚云戸銭の山衣あり  
 谷つげ鹿の鳴るきの五匹の持 其角  
 下五系荏乃実をほくく白れ 全

竜田川のらんさ 其角  
 仲人のあつゝ鹿もわれぬ 其角  
 柳田より水の拍や下むがち 角殺  
 老武者あ心つゝひや色みち 東順  
 此のあつゝや村の用さハやうさ 其角  
 昼南天紅葉 三幅射 其角  
 あつゝやをのうみわは山の奥  
 南天や 秋をうめゆる小倉山



岩城偕う窟として

嘉江

帝乃ハ綴テシのうてゝ草摺

初葺や白洲目見への所狩山 合志

葺おや山の阿あふふ虚勞病 其角

去葺をうても嗅くおせの菊 当吟

お葺れゆのをすぬ白うを 嘉柏

松葺や松あををかつる 蟻 波登

よこそや猪ハ尾上へ苗うり 桐子

松のあふその火えしけ落葉油 幸角

遊越歌

大町

目つあてゝ足羽おしやむお茶

そくしそくしハ松乃小風 山峰

柱巾ヤしあふ月出て 一雀

京の簞シを揚そふ成 其角

まねうある帯の栓サビ又守五分 蛸

四目ナカテ悪は舟のゆり合 町

も食やも鯨偕るの莢の中 角

克巳復礼あ佐乃 笠 荏



十念の内乱もろくで嘶り  
天の桶をききのせつもん  
江戸の國ハ後みかれと荒岩山  
子繩よ海ハ仲はら波  
たまきれと水もみられ後  
三升樽と地をてむつ云  
土用子の鯨をせざる月の泉  
名取成城とやす蟹り世  
梅桜松とあつてかけ火神  
角所荏角地荏角峰町

寺乃門てろくろぬき李の  
人のき味罪をこめを聾し  
梨子とち鞘もなまの元  
えせ馬ふかくい癖をけり  
おいははしと狂羽をける  
夕影よいろくろつる國の眉  
かゝい心をひげと鉄槌  
借金ち梓みりてあまじ  
豆腐の脉のきく佛名  
角町荏荏町荏荏町



初これと甬の廊は篋を巻  
琴子出るもの 八張の弓  
小納戸の檻形ハ風乃宮  
こり月もれて雲丹ニ輝く  
塩竈子せうをくべてあつる  
萩ハ田舎ハ麻の海を  
かり口皆緋威の女中  
よりや祭落くとも云線  
り灯はあこむ電も其の虫  
塙 荏 角 町 荏 角 町 荏 塙

岩の足をかたす最極 角

うら枯やそれけきり悲山 毎雨  
ふれや鞋やくまあふ畠中 雪子  
卵もすき草花はさる 笈の物 白揚  
因果屋ハいさなる筋り草の門 谷羊  
若の根や癖はなりてぬき佛 光月  
未枯やうふとうりハ門の桶 青磯



途行吟

翁

山城井出の習客を志す  
和時を志すをねや廉る谷 肅山  
市地概り病者を志すややと志 合志

遊金閣寺

八尋の楠乃板間をめぐりて 其角  
酒よりて二階うあぐりてれば 秋航  
傘て犬と仕あひやうと時を 唯口  
蜜の子や松を逢ふは 重巽

時やとあはよはむくり子 穹風  
あそふや板間をめぐりて 閑月  
大橋よりし投出はれれば 琴風  
せあるは暗よくあるは 山崎  
風やあまのよりあはむくり 心水  
食堂よりあそぶを 大町  
ありしは膏藥のそは 子

山館

門をうつりて飛ぶと 落葉搔 以翁



新宅質屋

竜尺

口切り茶て色つけん柱以

曰

あ仙や池つゝゐての小崎彦 具角  
燈甲や鼻をちくくして雨をす 子葉  
野ひらきや咳てふむく影の玉 附鳳  
藤ふや火圍ちくけて四十蔭 岡指  
羽代く氷魚休るもや灰せしむ 明言  
和巾かき交ぬあうもふおはる 倚窓

あつうや火圍の友乃ちあ代り 里東  
くの館をまひけさふ

醍醐味の館よりくををちあ代り 日あ

神もはあをちくくさふ

宮葉屋にてちあれた矢倉賣 其角  
ぬうりをすけし候も 措服<sup>カミコ</sup> 玄言  
居住ちやほおの張子乃己形 景帝  
るよりよみ継やうて改巾<sup>カミコ</sup> 龍尺  
此有より求めたりちあはあ講 含曲



吳竹の穿人あしあひあ講 景帝  
隣に八糊を摺る 弘化に講 玄言  
人妻ハ大根をうりをとけ 其角

何某の家子て歩流乃其の  
あつたあり

紅梨の下部もわらん玄猿を今  
それくして玄猿のおれ下猿白行猿  
白玉ハぬの子にあつる 椿うぬ 肅山

社頭霜

豊原のたれれやわむ松の葉 霜指

うつろとおれおの月の梢うあ 沈水子  
霧のあむよなもあせおとら 因水  
あけけとけあ痺るおおふ 風杏  
文りや蚌ああをのかさ子足 白獅  
室君ハあもあもあふ 合志  
妹う子を菊の足うらとあふ 其角  
傳あしあ玉水よりや村あふ 沽例  
ひを引牛のあくあやわゆる 苔淺  
よるあしや盆山のある磯海りあ



夢のつらさもさへり船ありし里圃

揚屋の柳をよ移をわけて  
片くらり通ひたかりけるを

移の毛や夢の衾のたふさけ其角

寒色や南大門乃ち所内今

重きありしを橋を何潜けりあ

多念仏それを出入の大工し大町

玉川や砂こけりよさへし千瀬

空舟やささるつらうす求川

田う吹風のきさや夕津系竜尺

艸庵の煙をよ

困遊の吟常記

風煙の火根

不呂吹や多きりみりやむ薬お吟

千手井をゆりよ汲よりも外午寂

風り吹や是を景園の押領使景帝

ふり吹や此ありりい但梁己辰甫盛

風り吹や大仏さのも柳さり楓子

風り吹の斤輪車ハ箸ありて堤亭

ふり吹や湯立の釜のやみ加減一佳



牧狩やゆるりゆるる金の所と 昌川  
ゆるりゆるるの床乃ちすれあ 紫  
ゆるりゆるる其のゆめハ見城 琴風  
日の本れゆるりゆるる一山 敵山 其角  
風乃吹ゆるりゆるる 狐も坊主ハ 鈴雙  
あかゆるる金剛杖を箸みせん 大町  
ゆるりゆるる安ありし名ゆるり 序今  
霧の毛やゆるりゆるる窓の中 闇指  
風乃吹や童子う角をたぐみ切 波琴

よもぎゆるる松のちのちあてふ  
アヤ あやゆるるちをまらるる  
ていへゆるるちをまらるる

やゆるりゆるるゆるる松の言 日來  
梅の洞壺の四角ハ一間とや減る  
官城あゆるるハ及あゆるるちを  
万客の朱唇をうるちを

初雪や湯のそ所の 大洞壺 其角  
それ九尺ハ二間の住所とて  
ゆるりゆるるゆるる世をたぐる  
窓錢のゆるる世をたぐる 吾らんか 今  
ねゆるる腸はあゆるるゆるるの 白楊



老死に詩をさし—事實

老歌者より身をくらえん情  
ともしにあられむこころ

雪のおや隣の狸ををひ

行房

山庄吟

蓑をきく人もありなれど 全

勝幅や水の中へみぬけり松 其角

山をのちりと氷るや勝乃雲 雪谷

海龍をのひきより伝ふ雪外 角枝

伝ふや馬車る乃掃除すハ 可候

茶の会よりたの心やけすのゆき

玉菱

初ゆきや兔の耳はあつくり

應三

と水の雪お戸乃筆や松のひま

心水

こつちやちりり越のせと硯 糸

兔谷

力節唱し老のぬきや雪の外

虎岑

はつ雪や冬の雨く井ぬら

寺御

牛馬渡航并遊り

雪桑やわたりもふし大井川

糸外

柴うりの流うおや雪の原

全



えすう川牛甲よりあり

日月のすめをるる

中<sup>リ</sup>砂の別<sup>リ</sup>崎もありや雪のふ 其角

所思

おゆふふつりみや大江山 新航

帆房より雪をふてく  
香粧よりもてある

淡雪くげー人形もつるわし 兼夢

小車の歩息所やゆきよらんけ 雪吹

初雪や木の若さをくぐる詠次乃者 糸帘

まつ雪や居るの巻よりつくも山 口遊

はつちうとくちの姫を逢ふものあり 含曲

初雪や柏子木さわる小乃 窓 青峰

初雪も雪も力ふる小 夕月 望遠

空城や雪もぬつて雪ちりし 琴風

傘をちやせんくけや雪の音 ちか

いろは乃所物を  
ちか

けちふいの字の奇楠や牛食塩 三弄

柿塙や雪ふくふく志あきく 其年



棄字吟

松楓子

聲をいつれる事のありて聞くもの  
うゝをさるゝをすてゝあるゝある  
人のさるゝはなれぬものありて  
何れもすてゝ世もすてゝすを  
みちゝあるゝあるゝ中比  
草山の元政土山のむすをさるゝ日  
あゝくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
すゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

止観に至りぬ今の幻尼のうゝれとも  
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
控ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
武蔵理やすゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
綿弓やゆきの反摺はゝゝゝゝ  
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
雪やゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
ゆゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ



世ふ世の雪は女房のあてにある  
 午寂  
 江にふるふのふるや雪の石  
 景帝  
 脱すてあるハ衣の裾のゆき  
 紫衣  
 初ふや病氣は庭うたてある  
 躬ま  
 のりまてあるハ誰鞍まの門  
 心あ  
 塙尻ふく雪と豆<sup>キウス</sup>查う換てある  
 白柳  
 雪の戸や酒かなあふすてあは  
 周指  
 木はりや雪の布杭はてある  
 序令  
 象深の名やすてある人の雪  
 硯水

庚申吟

年長毎<sup>ニ</sup>勞推<sup>ス</sup>甲子夜寒<sup>メ</sup>初共守<sup>レテニ</sup>庚申也  
唐の并<sup>ニ</sup>渾<sup>一</sup>う得<sup>ル</sup>句をえいしてくばぬの文  
以てするともせは三子あつちをさしり  
あへんうだうくうけよ壺又傳教大所  
歸朝乃存台山の猿守とあるありき  
世子七猿の和歌を志海しすのまにカ  
あとのひしむ世を存る羽院庚申の百首  
保永尾院乃流會もしくとや  
庚申の雨といふ題にて



は隙を人々延さる花んが 其角  
花より何し志賀の山をさりて  
吹雪をいふ灯あもよにいづ三吟  
と吞うけりてゆへは惜年の  
とあを叙せ

其角

思ふる山やあめ乃かのえ申

たす初づよ 浅黄 赤紅 紫紅

要<sup>カナ</sup>を啗ハいふはり 其角  
要<sup>カナ</sup>を啗ハいふはり 其角

月よとれす屋のあまりの古ゆき 其角  
赤子の眼あつ玉よりあ 其角  
瘦菊をいひの元よあめく 其角  
揖のいれを火掻也より 其角  
教経と波あまのあ 其角  
もりより飯をかこむ城 其角  
そのふ梁<sup>マ</sup>へはなうものい 其角  
捕<sup>カ</sup>より破家鴻門乃 其角  
簪<sup>カ</sup>の屋のぐらにさいの何原 其角



二及三畝<sup>セ</sup>を隠田徳月 紅  
お撲非裸ありておまそや 角  
幾の斑分は耳成山陰 平  
めつういも花を尋ねてくら矢阿 角  
千太逐くま乃勝音 角  
床入又守りをとれを待たふろ 平  
對馬へかこつ人參の搦 角  
登蓮う下詠のお齒子雨とれく 角  
猶りけりし四喜まふら 平

夕されハ祝仁ととく非不笛 角  
あゝうさびの山陰足程 角  
孔明乃力りけし麻濃角 平  
さすそくひて秋の夜月 角  
皆尾ふ中の地蔵乃明芝居 角  
蘇鉄あ町や姥の筈 平  
ま何れ評をきぬ君あはく 角  
四ッ子もろんで慈と頼摺 角  
け螢いつの世までありしよま 平



取巾とくはる通角々像  
般の名ハ雷<sup>ス</sup>とひくし  
八十八て三番三小世  
笈のふ羽黒及者子おむ山  
塩を拵せてわくは山  
角 平 角

偶興

三嘯

朔日やおと子尋ぬる家の中  
母子遊歴<sup>ス</sup>と山は所  
行嘉



